

## 近世村落の研究

## — 常陸国行方郡牛堀・永山両村を中心に —

A Study of the Village Formation in the Edo Period  
— A Case Study of the Former Ushibori and  
Nagayama Village, Namekata-gun, Hitachi Province —

門前 博之

KADOMAE Hiroyuki

本年度の牛堀・永山両村の調査で意図したことは、川岸として発展した牛堀の様子や牛堀川岸を利用する近隣村々の商家を聞き取りによって確認し、牛堀川岸を中心とする流通経済圏の大凡を把握することであった。しかし、商家の浮沈が激しかったためか、思うような聞き取り調査の結果を得ることはできなかった。また、本年度は、近世村落の研究というテーマのもとで、かつて研究の対象とした現神奈川県大井町の旧村々の再検討を視野にいれ、その調査の実施も計画した。

牛堀・永山両村の調査では報告せねばならないような結果が得られなかったため、以下、大井町の旧村調査を山田村を中心にしつつ、その報告を行うこととしたい。

旧山田村調査で意図したことは、同所了儀寺所蔵文書中の天正検地帳(写)・明暦元年年貢勘定帳を写真撮影し、かつて行った研究の資料的点検等を行うことであった。山田村には寛永18年検地帳も残されているが、年貢勘定帳の再検討は、明暦元年まで14年しか隔たっていないため、その年貢負担者と寛永検地名請人とを照合することによって、検地名請人が年貢負担者かどうかという基本的事柄を確認するためである。

しかし、史料の保管状況は別棟に史料室が設けられているなど、以前に比べて一段とよくなっているが、天正検地帳(写)・明暦元年年貢勘定帳とも史料室の文書を並べた棚にはなかった。誰かが借用しているようで、残念であったが、以前検討を加えられなかったいくつかのほかの史料の写真撮影を行った。

そのなかの一つが「戊戌十月十三日 山田村家次御改書上ヶ長」である。『神奈川県史』資料編4にはその帳の明和6年の写しをさらに文政9年に写したと思われる

他家文書が収められているが、その表紙には「万治三戌十月十三日」とある。万治の戌は元年であるので、この帳が万治元年のものであると理解できる。

この帳には80の家と寺一ヶ寺が記され、その戸主名・戸主の年齢・所持耕地面積・名主等村内の役職ほか隠居や門・柄在家等村内の身分等が記されている。山田村には万治3年検地帳(写)も残されているが、検地帳やその時期における村内構成を理解する上で重要な史料である。以下、その内容を整理しよう。

戸主の年齢と所持耕地面積はすべての戸主に記されていないが、所持耕地面積は37名に記されている。最大は名主七郎左衛門の6町7反余で、22名が1町5反以上を有し、以下が15名と、所持耕地面積は1町5反以上層がほぼ6割で、比較的大規模な耕地所有者が多い。どうしてこのような耕地所持となるのか、実際の経営主体と経営規模を示すものとも推測できるが、現在のところ不明である。

以上のほか、この帳に記された山田村の村内の役職等についてその人数を併せて記すと次のごとくである。

名主	3名	山伏	1名
組頭	5名	ねき(祢宜)	1名
山めぐり(廻)	2名	隠居	13名
やふ(藪)廻	2名	門	14名
御えさし(餌指)	1名	から(柄)在家	11名
商人	6名		

山廻・藪廻は山や藪を管理する役職ではないかと思われるが、商人が6名と以外と多いことが注目される。

「門」は門之者あるいは門屋で、柄在家とともに隷属的農民であると考えられるが、合わせると25名と家全体の3割以上を占めている。

万治検地帳の名請人数は134名であるが、その名請人と照合すると、商人とされるものは6人中4名がその所持耕地3反以下であり、商人の所持耕地は零細なことがわかる。門や柄在家について同様にみると、門は14名中11名が照合できたが、1町6反～1町が3名、1町～4反が4名、4反以下が4名、柄在家は11名中8名照合できたが、1町3反余が1名、1町～4反が5名、4反以下が2名のごとくで、隷属的農民と考えられてもその所持耕地面積は通常の農民より多いものが存在することが注目される。

寛永検地の名請人数60名に比べ、万治検地ではその倍以上に名請人数は増加しているが、その背景には門や柄在家等の隷属的農民が広汎に名請人となっていたことが考えられる。それでは、このような動向は寛永検地にも認められるのかという問題が生じるが、断言しうだけの検討は進んでいない。今後の課題である。